

○「珍翫鼠育艸」に登場する鼠への想い

芹川忠夫(京都大学・院・医・動物実験施設)

ネズミに対する想いは、西洋と東洋において異なるようだ。これは、ペストの世界的な大流行(541年～、1346年～、1855年～)と関係しているかも知れない。レンブラントのエッチングの中に、鼠駆除を商いに行っている人(The Rat Killer, 1632年)を描いたものがある。また、100匹のドブネズミを囲いの中に放ち、イヌを使ってそれらを殺す時間を競ったラット殺しゲームが、19世紀にヨーロッパで行われており、米国にもこのゲームが伝わっている。

ちなみに、Billy the Rat Killing Dog(1832年)の絵の説明には、ビリーの記録は5分30秒であったと記載されている。何と、悪趣味なゲームであろうか。



「ラットの駆除屋さん」
レンブラント作(1632年)



「19世紀のラット殺しゲーム」(1832年) 共に The Rat より



これに対して、「養鼠玉のかけはし」(1781年)に描かれている江戸時代の愛玩用の鼠ショップは、何とほほえましいものか。先のラット殺しゲームとは大きな違いである。中国には、1780年に鼠使いの記録がある。日本の愛玩鼠の文化は、おそらく中国から伝わったのであろう。

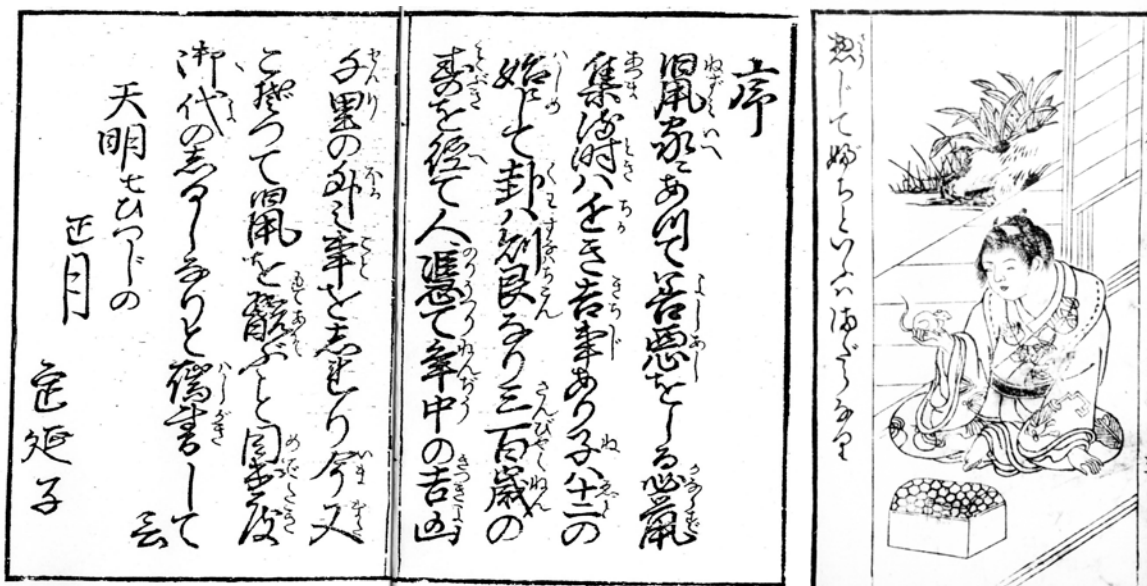


江戸時代の愛玩用
鼠ショップの賑わい
「養鼠玉のかけはし」
(1781年)より

○目次

| | |
|-------------------|----|
| 「珍翫鼠育艸」に登場する鼠への想い | P1 |
| 事業計画・予算 | P4 |
| 事業報告・決算 | P5 |
| 平成15年研修会報告 | P6 |
| お知らせ | P6 |

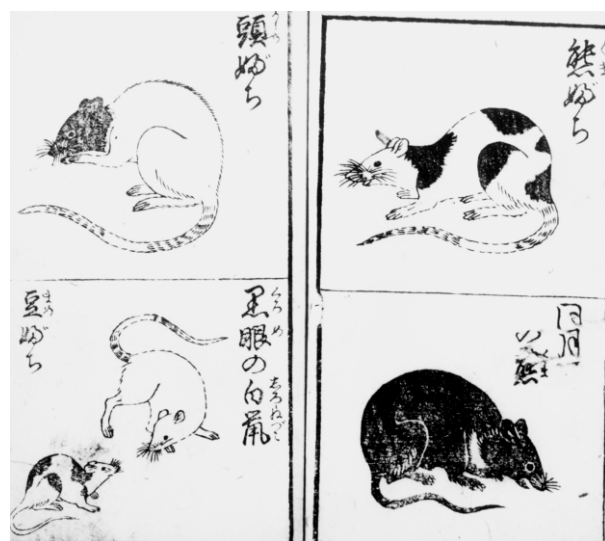
「珍翫鼠育艸」は、天明7年(1787年)に京都の銭屋長兵衛が出版元で発行された江戸時代の鼠愛好家向けの小冊子である。著者は定延子であろう。京都帝国大理学部動物学教室の徳田御稔先生は、1935年に遺伝学の国際学術誌 The Journal of Heredity に An Eighteen Century Japanese Guide-Book on Mouse-Breeding という論文を発表されている。その中で、この「珍翫鼠育艸」は、The breeding of curious varieties of the mouse と訳されて紹介されている。しかし、鼠のサイズが明記されていないので、これがマウスであると言明できないと思う。登場する鼠の毛色とそのパターンや絵からは、私には、むしろラットのように見える。この冊子には、「序」、「白鼠のはじまり」、「諸鼠の異名」、「諸鼠の絵図」、「鼠とやにてわけをくべき心得の事」、「同じく子をうみ候いて心得とやの事」、「豆白豆ぶちの事」、「同じく日々ならびに暑寒食物の事」、「同じく鼠つよくかふ事」、「鼠食物の善悪の事」、「同じく牝牡見分けやうの事」、「鼠種取様秘伝」、「地鼠之事」、「珍鼠之事」という章が設けられている。



「珍翫鼠育艸」の「序」と「鼠を手の上に乗せて遊ぶ子供」の絵 (1787年)

「白鼠のはじまり」の章には、京都宇治の黄檗山万福寺の開祖隠元禅師が中国から招かれた承応3年(1654年)に、黒眼の白鼠をペットとして随伴され、その子孫を譲りうけた商人の家業が大いに栄え、この鼠が大黒天のお使いと呼ばれたのだとある。そこで、隠元の研究家である大槻幹郎先生(花園大学前講師)とお会いして、黄檗山と隠元に纏わる鼠の話の存在についてお尋ねした。

先生によると、唯一あるのは、「白鼠歌」という隠元が詠まれた長歌に出てくる鼠のみであろう、とのことであった。その長歌には、「大雪の翌朝、修行僧が台所で一匹の瑞鼠(めでたい鼠)を捕らえて差し出した。見ると、体全体が白玉の色で、両眼は、銅色の瞳で黄金の光を放っている。薄い両方の耳をまっすぐ立て、五つの爪は赤くて鋭い、堂々たる威容で静かにいて、怖がる気配は全くない。これは吉祥の知らせだ。云々(崔宗虎先生(島根医科大学)の訳)」と詠まれている。そこで、万福寺を訪れ、隠元が末年を過ごした松隠堂や境内の建物、回廊を巡り、鼠にゆかりのあるものに出会えないかと散策した。残念ながら、何も見出せなかったのであるが、昔の恋人に、ひょっとして出会えるのではないかと思っ歩いて歩くような、妙な気持ちに浸ることができた。



「珍翫鼠育艸」の鼠の絵

ご存知のように、一時代前までは、実験用のラットはダイコクネズミと呼ばれていた。「珍翫鼠育艸」に書かれている鼠は、やはり、ラットではないのかと思うのである。この冊子に登場する黒眼の白鼠に加えて、頭(かしら)ぶち、月の熊といった毛色パターンは、20世紀初頭、米国ハーバード大学の初代哺乳動物遺伝学者 W. E. Castle らが Modifier 遺伝子の概念を実験的に明示した論文に出てくるものと、酷似している。彼らは、ラットの頭巾班の有色分布量は、頭巾班遺伝子とその Modifier 遺伝子によって制御されていることを示した。熊ぶちの毛色パターンは普通には見かけないが、英国や米国のラット愛好家のコレクションには、ダルメシアンという名で登場する。また、戦前に岐阜に長吉ラットというブチラットが実験用に生産されていたという。現在、医学生物学等の研究に利用されている実験用ラット系統は、先に紹介したラット殺しゲーム用に繁殖されていたラットに生じたアルビノ mutant に由来するのではないかと、一般的に想像されている。

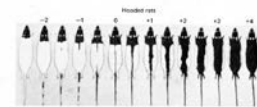


Fig. 26. Castle's grading scale for hooded rats, largely worked out by Castle and Phillips in 1914 (23). [From Castle (22)]

B. Castle's Second Career

The year 1936 was another major turning point in Castle's life. With the completion of the new Biological Laboratories on the main campus, the Bussey closed its doors and Castle went into retirement, both on July 1, 1936. In the words of Dunn (48), "... the rich odors of an old building which housed hundreds or thousands of rats and mice and rabbits and guinea pigs, and the spaciousness (and often the low temperature) of its high-ceilinged rooms faded in the end to compensate for its physical separation from the main center of the University." Despite his disappointment, Castle faced these new realities squarely as expressed in a letter to Dunn in February of 1936: "I am grateful for the long continued opportunities which I

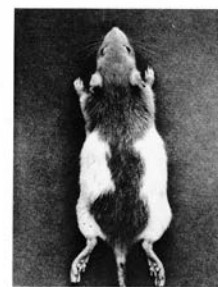


Fig. 28



Fig. 37



Fig. 39

Figs. 27-39. Rats representing 3 alleles at the H locus, from the work of Castle: Fig. 27, Irish (147) rat of grade + 3; Fig. 28, Hooded (180) of grade + 2; Fig. 39, South (149) rat of grade + 1. [From Castle (22), by permission.]

Castle ら頭巾班の遺伝学的研究

The Laboratory Rat, Vol. 1

Academic Press より



愛玩用の黒眼の白ラット
The UK's National Fancy Rat
Society <http://www.nfrs.org/>より

私たちは、今、ナショナルバイオリソースプロジェクト「ラット」において、国内および諸外国のラットを対象にした収集・保存・提供事業を実施している。この事業におけるゲノムプロファイルの調査から、実験用ラットのルーツについて新たな知見が得られるかもしれない。

SHR や SER は、日本に里帰りしたラットから生まれたのではないかと、という私の勝手な思い込みに、科学的な答えが得られたら面白い。

参考資料

1. 珍翫鼠育艸の所在：国立国会図書館の国会図書館本、香川大学の神原文庫本、甲南女子大学の上野文庫本
2. 白鼠歌：隠元和尚松隠二集巻四歌
3. Tokuda, M. An Eighteenth Century Japanese Guide-Book on Mouse-Breeding. The Journal of Heredity 26:480-484, 1935
4. Castle, W.E. Variation in the hooded pattern of rats and a new allele of hooded. Genetics 36: 254-266, 1951.
5. The National Bio Resource Project for the Rat in Japan (NBRP-Rat): <http://www.anim.med.kyoto-u.ac.jp/nbr/index.htm>
6. The Laboratory Rat, Vol.1, Biology and Diseases. H. J. Barker, J.R. Lindsey, S.H. Weisbroth. American College of Laboratory Animal Medicine Series. Academic Press 1979.
7. The Rat: A Perverse Miscellany collected by Barbara Hodgson. Grey Stone Books. 1997



愛玩用のダルメシアンラット
The American Fancy Rat and Mouse
Association <http://www.afrma.org/>より